

都市遺産を考える

— 次代に引き継ぐ物語 —

池田 誠一

— 連載にあたり —

昨年末、名古屋の都市づくりの記念碑のような建物の除却が決まりました。経緯は本文で紹介しますが、その除却の原因を突き詰めると、建物のもつ意味が広く理解されていなかったことにあったのです。

近年は、歴史まちづくり法などの法律が整備されて、都市の中の歴史的な物件の評価が進んでいます。しかしまだ、見落としや未評価のもの等が残っており、大切な歴史遺産が消えていくということが分かりました。

そこでこの1年、改めて名古屋という都市の歴史を振り返り、我々が、子々孫々に語り伝えるべき「名古屋の都市遺産」とは何かを考えてみることにしました。まだ未知の世界ですが、連載を始めてみたいと思います。

池田 誠一

【1】都市の遺産…語りたくなる物語

1 「遺産」指定ブーム

ユネスコは、1972年に「世界遺産条約」を採択し、遺産に対する認識が高まりました。日本では1993年、白神山地などの自然遺産と奈良・法隆寺などの文化遺産が登録され、世界遺産ブームが起きました(図1)。現在では、国内で20件、世界では1,000件を超す遺産が登録されています。



図1 日本で最初に世界遺産に登録された白神山地。
ブナ林の向こうに岩木山

つづいてユネスコでは、2003年、「無形文化財保護条約」を採択し、芸能や祭りなどの無形遺産の登録を始めました。日本では2008年、能楽や歌舞伎などが登録され、現在国内では22件となっています。

一方、文化庁は、平成27年度(2015年)から、日本的な文化財に着目した「日本遺産」の認定を始めました。初年度は18件が定められ、2020年に100件を目指しています。

また、これらの他にも、土木、建築などいくつかの分野で、遺産の選定が進められています。

それぞれの遺産は、目指すものや位置づけが少しずつ違いますが、いずれも現在ある資源を評価し、将来に引き継いでいこうとするものです。今回は、上記、世界遺産と日本遺産の指定の視点を検討しながら、私の思っている「都市遺産」を整理してみたいと思います。

2 都市遺産の視点

(1)世界遺産

世界遺産とは、「地球の生成と人類の歴史によって生み出され、人々が過去から引き継ぎ未来に伝えねばならない人類共通の遺産」とされます。契機になったのは、1960年代のアスワンハイダムの建設によるナイル川流域の保存運動です。そのときユネスコで「人類共通の遺産」という認識が生まれました。そこで、文化遺産と自然遺産に分けて世界遺産の登録を始めました。

その選定にはいくつかの基準があります。難しいのは、その証明について「真正性」と「完全性」が求められること。申請国に「保存の保

証」を求めていることでしょう。いわば世界遺産は地球的視点で見た日本の重要文化財級の遺産といえることができます。

(2)日本遺産

これに比べると、日本遺産は全く別の視点で制定されました。制定した文化庁によると、それは、「地域の歴史的な魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」とされ、文化庁が「認定」します。したがって、世界遺産が価値を評価して保護を担保するのに対し、日本遺産は既存の文化財を活用し、外部に発信することで、地域の活性化を図るものなのです。具体的な基準は、①ストーリーであること、②中に文化財にまつわるものがあることで、ネットワーク型も認められています。

いいかえれば、これまでの文化財行政は点としての指定であり、保護を目的とするものでした。これを反省し、それらを集め、付随するものを取り込んでグループ化し、ストーリーとしてまとめます。それを地域の観光資源にしようとするものなのです。したがって、世界遺産のように保存は問題にされず、むしろ文化財を観光開発に活用するためのものといえるでしょう。

(3)都市の遺産

さてこう見たうえで、本連載の都市遺産はどう考えるべきでしょうか。キーワードは4つ。保存、価値、ストーリー、活用です。

まず、①「保存」については、もちろんそれが目的です。しかしこれを担保しようとするのと逆に、選定は極めて難しくなります。これは目標にとどめておくのが現実的でしょう。

②「価値」についても、確実であることは大切ですが、例えば「日本一」「日本初」ということでも、それを証明するには大変な手間がかかります。まずはその可能性にとどめ、確定は順次行っていけばよいと考えます。

一方③「ストーリー」は、次代に引き継ぐ時にはわかりやすく、有効な手段です。予算も時間もあまりかかりません。そのものがどうして市民にとって誇りになるのかを、広域な視点で説明することでしょう。ここでは日本遺産の「ストーリー」と混乱しないよう、「物語」としておきます。また④「活用」は、もちろん必要ですが、それは目的ではありません。それよりもその遺産を、市民が胸を張って語れるように広報することが重要でしょう。

このように考えると、本連載で考えねばならない「都市遺産」は、市民一人ひとりが、他の地域の人に、誇りをもって語ることでできる物語を、歴史の中から掘り起こすということになるといえます。

3 紀行 消えた都市遺産

… 瑞穂区の洋風長屋 …

それでは、都市遺産を考えるきっかけになった瑞穂区の建物を案内したいと思います。それは小さな建物ですが、背景には、日本の近代化の先進例を読むことができるのです。

〈日本初の工業団地開発〉

明治維新、我が国は富国強兵と並んで「殖産興業」の道を選びました。重点は農業から工業に。そして重工業を志向するようになりました。ところが重工業化を図るには難問がありました。それは工場用地の確保です。土

地ばかりではなく、大量の物資の運搬、労働力の確保等大きな問題がありました。

明治の30年代後半。名古屋に大きな兵器工場の建設が決まりました。場所は東海道線の熱田駅の近くでしたが、低湿地のため大量の盛土が必要でした。そこに目を付けたのが名古屋市です。すぐ横を流れる精進川改修の資金不足を、埋戻土の提供でカバーすることにしました。すでに流路を直線化して運河にする改修計画ができていました。

一方、明治42年に大改正された耕地整理法を拡大解釈し、市街地整備を企画する人が現れました。財源に上記精進川の廃川跡の譲渡を受け、大正元年、耕地整理組合を設立しました。こうして運河・新堀川の隣接地が市街地として整備されることになったのです(図2)。そこは市街に近く、運河に沿った絶好の工業用地に変わることになりました。



図2 明治43年に完成した新堀川と記念碑。
この運河を起点に、工場、住宅、と開発が進んだ

その耕地整理は、東側の台地も範囲でした。そこで、工場の従業員の宅地として開発が始まったのです。「運河→工場→住宅地→商店街」という開発が、明治末から大正という時代に進むことになりました(図3)。

今日広く行われている「工業団地」の始まり

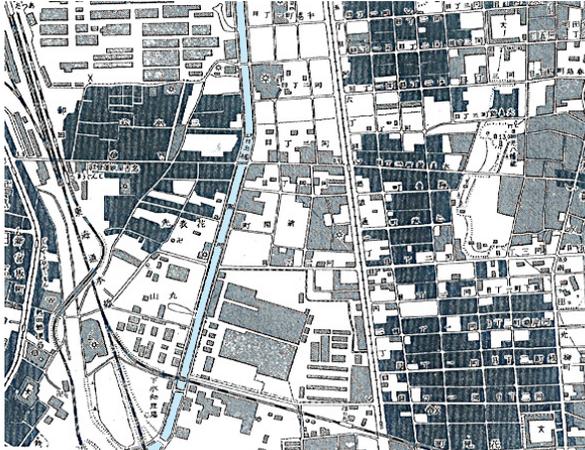


図3 昭和12年ごろの新堀川(中央やや左の南北の筋)周辺。長屋は右下部にあった



図4 東京大田区の下丸子の耕地整理。
整理前(上)と整理後(下)：整理碑より



図5 四連長屋の調査記録(正面図)。
右2軒と左2軒では少し意匠が変えてある(文献③)

は、東京大田区の下丸子で、昭和9年頃とされています。大正の後半に耕地整理を始め、昭和になって工場が進出しました(図4)。したがって名古屋の例はそれより古いことになり、我が国最初の工業団地と云えるのです。しかも隣接して従業員の住宅地もできました。その住宅の中には、大正モダンの影響から、洋風のものがあったのです。**〈大正モダンの洋風長屋〉**

名鉄名古屋本線の堀田駅を降り、東側の歩道橋を渡って左に下ります。すぐの道を右に曲がると商店街になっています。大正時代に西側に出来た大きな

紡績会社の従業員が、東側の住宅地に帰る道が商店街になりました。沿線は「大正町」と名付けられています。東に進み3本目の角を右に曲がります。次の角の左手前に、その長屋は建っていました。大正時代に建てられたという、平屋の4軒連続した長屋です(図5)。

その長屋には当時としてみると、いくつかの特徴が見えます。一つは、和洋折衷だったこと。二つは、長屋(賃貸)だったこと。三つは、庶民宅だったことです。正面の外観は洋風の作りで、壁はモルタル塗り、窓はガラスの、ちょっとしゃれた形です。大正の洋風長屋建築は全国的にもいくつか見られますが、2階建の立派な建物が多いのです。小さな二

間か三間の洋風長屋は貴重な例ではないでしょうか。大正という時代は、モダニズムに特徴づけられます。それが庶民の建物にも入り込んでいました。「アパートメント」と呼ばれるものの初期のものといえ



図6 四連長屋の除却前(上)と除却後(下)

るかもしれません。

昨秋、壊される前に内部を見学させていただきました。玄関には、角にドアがあって直接客間に入れるようになっています。百年近い利用で改修された所も目立ちますが、四軒を比較してみると当初の姿が分かります。奥の台所は土間でしたが、その脇に一畳の畳敷があり、食事のスペース、ダイニングキッチンのもようでもあります。小さい家ですが機能的で、夫婦二人と数人の子供が生活できる構造になっていました。

この建物が貴重だったのは、明治から大正の一連の都市開発の結果を示す生き証人だったからです。この建物があって、物語が伝わるからなのです。壊されたのは、所有者にその価値が知られず、老朽化したために改築の手続きが進んでしまったからでした。行政が気付いたときは手遅れだったのです(図6)。

4 大切な「物語」

名古屋市は、歴史まちづくり戦略の目標に、「語りたくなるまち名古屋」を謳っています。

しかし考えてみると、市民はどれだけ語りうる情報を持っているのでしょうか。歴史的事実だけでは語ることはできません。名古屋城なら、「1610年、徳川家康が、戦災で、戦後再建」でしょうか。そこには「なぜ」や「そもそも」などといった物語の要素がありません。それがないと語ることは難しいのです。

この連載では、このような「なぜ」「そもそも」等を意識しながら、名古屋の歴史を追って「語りたくなる物語」を探していくことにしたいと思います。

〈主な参考文献〉

- ① 一個人編集部『日本遺産を旅する』
(2016、KKベストセラーズ)
- ② 名古屋市「語りたくなるまち名古屋」の実現を目指して」
(2011、名古屋市)
- ③ 名古屋市「歴史的建造物調査結果概要書」
(2016、名古屋市)